

岩付太田氏と難波田城

竹 井 英 文

はじめに

関東地方のなかでも、埼玉県は近年特に城郭研究が盛んな地域である。いわゆる「杉山城問題」^①と前後して、各地で発掘調査やシンポジウムが活発に行われ、平成二十年三月には杉山城跡・小倉城跡・松山城跡が菅谷館跡とともに「比企城館跡群」として国指定史跡に指定されるなど、城郭の調査研究・整備活用の最前線に位置する県であるといっても過言ではないだろう。

そうした研究の蓄積を踏まえつつ、筆者も文献史学の立場から、これまで埼玉県を含めた関東各地の城郭に関する文献史料の検討を積み重ねてきた^②。筆者のこれまでの一連の研究は、すでに史料集などで公表されているが、十分検討されてこなかった史料に光を当て、各城郭の歴史を可能な限り明らかにしてきたものである。周知の史料であっても、城郭研究という視点からは十分検討されていない史料が意外にも多く存在しているのが現状だということが徐々に判明してきたといえる。様々な課題が山積している近年の城郭研究に対し、文献史学が行うべきことは、そうした史料の発掘と丁寧な検討を通じて、各城郭の歴史的位置を明確にしつつ、議論の基礎となりうる情報を確定していくことであると考えている。

今回検討する埼玉県富士見市の難波田城は、古くから知られる県内でも有名な城の一つである。それにもかかわらず、後述するように、その歴史は江戸期以降の地誌・編纂物や発掘調査から検討されることがほとんどで、詳細は不明とされてきた。しかし、難波田城関係の文献史料も実は存在していることは、あまり知られていない。そこで、本稿では、その史料を紹介しつつ、難波田城の歴史を可能な限り探ってみたい。

1. 難波田城の研究史

本章では、現在に至る難波田城の研究史を整理したい。その作業にあたっては、『日本城郭大系』^③、『埼玉の古城址』^④、『富士見市史』資料編二考古^⑤、『埼玉の中世城館跡』^⑥、『富士見市史』通史編上^⑦、『難波田城跡』^⑧、『難波田城のすべて』^⑨などを参照したが、基本的には『難波田城跡』と『難波田城のすべて』に依拠していることを断わっておく。引用部分は適宜指摘したい。

（1）難波田城の立地・縄張

難波田城は、埼玉県富士見市下南畑に所在する平城である。現在は中心部の一部が市立難波田城公園として整備され、難波田城資料館も建てられている。南畑地区は、荒川と新河岸川の形成した標高七メートル前後の自然堤防上に位置し、城跡はその最高所に立地する。そのため、城跡周辺は湿地帯となっており、天然の要害の地といえよう。

南側が大手と考えられ、鎌倉街道の枝道とされる「羽根倉道」が近くに通っており、現在の所沢市と加須市を結んでいたとされる。また、城跡東側を流れる荒川の渡河点とされる「羽祢蔵の渡」も近く、街道と河川交通を抑える城であったことをうかがわせる^⑩。

現在は開発が進み、遺構はほとんど失われてしまったが、江戸期作成の絵図が数多く存在し、後述する発掘調査でもこれらの絵図と合致する結果が出ているため、その縄張を知ることができる（図1）。

難波田城は、「本城」＝曲輪1を中心に三重の堀と土塁がめぐり、川や沼地・湿地帯・深田に囲まれた要害堅固な城だったようである。忍城や岩付城に類似しているといえよう。本郭北側の搦手方向に「二の曲輪」があり、西側に「嶋曲輪」や「蔵屋敷」、「井戸曲輪」が、東側に同じく「蔵屋敷」や「天神曲輪」などが絵図にみられる。「嶋曲輪」は「丸山」ともいわれ、現在も「本城」西側に一部現存しており、江戸時代に城跡に建てられた修験道寺院・十玉院の墓地となっている。「天神曲輪」には現在も天満宮が建っている。「本城」から南側に曲輪が三つ続くが、「曲輪2」は馬出そのものであり、その形状から角馬出と評価でき、縄張構造上注目される。また、随所に折れが見られるなど、複雑な縄張となっている。なお、「曲輪4」の西に隣接して、現在難波田城資料

館が建っている。

（２）難波田城の歴史

難波田城の歴史を考えるうえで基本となっているものは、『新編武蔵風土記稿』の記述である。それによると、扇谷上杉氏の重臣・難波田善銀の居城とされ、善銀が天文十五年（一五四六）の「河越夜戦」で討死した後は北条氏の支城となり、その家臣である上田周防守が入城し、天正十八年（一五九〇）の小田原合戦後に廃城となった、とされる。まずは、城主とされる難波田氏の歴史をみてみよう¹¹⁾。

難波田氏の祖は、村山党に属する武士であった金子小太郎高範とされ、承久の乱の戦功により子孫に難波田の地が与えられ、以後難波田氏を名乗るようになったといわれているが、定かではない。難波田氏の初見は、南北朝時代である。観応の擾乱時に、足利尊氏派と直義派が武蔵国各所で激突しているが、正平七年（一三五二）正月の尊氏派の高麗経澄軍忠状に、現在の志木市宗岡の羽根倉付近で直義派と合戦し、直義派の「難波田九郎三郎以下凶徒等」を討ち取ったと記されている¹²⁾。その後、応永七年（一四〇〇）十二月に鎌倉公方足利満兼が、鶴岡八幡宮に「武蔵国入東郡難波田小三郎入道跡」を寄進しており¹³⁾、この頃に難波田氏が難波田の地を没収されていたことがうかがわれる。この間、難波田に難波田氏の居館があったと考えられている。以後、戦国期まで難波田氏の動向は不明となる。

戦国期になると、扇谷上杉氏の重臣として難波田弾正左衛門尉善銀（正直）が登場する。善銀は、『関八州古戦録』や『北条記』などの近世編纂物に勇将として描かれ、一次史料にも登場する、戦国前期の東国を代表する武将の一人である。この善銀の居城が難波田城とされ、戦国期になって難波田氏の居館を中心に城郭化したものと考えられている。ただし、上記史料類によれば、善銀はあくまで松山城にいたものとされている。天文六年、扇谷上杉氏は、北条氏の進出を阻止するために武蔵深大寺城を「再興」するが、それに直接携わったのは善銀ともいわれている¹⁴⁾。深大寺城「再興」の直後、扇谷上杉氏はその居城である河越城を北条氏によって追われ、善銀の居城である松山城に籠城することになる。その後、天文十五年に河越城の奪還を目論んで河越城を包囲するが、救援にきた北条氏康と戦って敗れ、当主である扇谷上杉朝定とともに善銀

も討死した（河越夜戦）。

その後、永禄二年作成とされる『小田原衆所領役帳』に、小机衆の上田左近の所領として難波田がみえることが知られている⁹⁹。『風土記稿』に登場する上田周防守との関係が指摘されており、善銀死去後に北条氏家臣・上田氏の所領となっていたことは確実である。現在みられる縄張も、北条氏によって改修されたものとする研究が多い。

このように、難波田城の歴史については、難波田氏の居館から始まり、戦国期には難波田氏の居城となり、その後は北条氏家臣・上田氏が入城して、現在みられる縄張が完成して小田原合戦まで存続した、と現在でも理解され通説となっている。しかし、難波田城そのものが登場する史料は紹介されていない。また、難波田善銀はあくまで松山城にいたとされ、難波田城との関係を直接示す史料は見られない。同様に、上田氏についても、難波田に所領を持っていたことは確実だが、その頃にも難波田城が存在し上田氏が城主になっていたことを直接示す史料は見られないのである。有名な城ではあるものの、意外にその歴史は不明確であることがわかるだろう。

（3）発掘調査の成果

難波田城は、過去数回にわたって発掘調査が行われ、豊富な遺物が出土しており、発掘調査報告書も刊行されている¹⁰⁰。本章では、報告書と浅野晴樹氏の研究¹⁰¹を中心に、その成果を整理したい。

発掘調査は、「本城」と内堀を中心として行われた。遺構としては、井戸、掘立柱建物跡、地下式抗が検出されているが、「曲輪2」と「曲輪3」を結ぶ木橋の跡が橋脚ごと発見され、掛け替えや改修の痕跡も確認されたことは注目される。特に「曲輪2」側の橋の幅が狭くなっていることが判明し、城の防御のあり方を考えるうえでも貴重な成果といえる。

遺物は、種類も量も豊富に出土している。「本城」からは、大量の土師器皿片のほか、瀬戸美濃製品の縁釉小皿・天目茶碗・大皿・挟み皿、中国陶磁器、在地瓦質片口鉢、常滑片口鉢、常滑甕が主に出土している。瀬戸美濃製品は、古瀬戸後Ⅰ期から大窯第Ⅰ段階までが出土し、主体は古瀬戸後Ⅳ期新段階となっている。常滑製品も9・10型式が主体であるため、「本城」の遺物の年代観は十五世紀後半を中心とするようである。

一方の内堀からは、土師器皿や瀬戸美濃製品・志戸呂製品の縁釉小皿・天目茶碗・内禿皿・折縁皿・丸皿、中国陶磁の白磁皿C群・E群、常滑製品、かわらけなどが出土している。かわらけは、内堀覆土から大量に出土しているが⁹⁸、田中信氏によると「扇谷上杉氏のかかわらけ」のR種であるとされ、「RⅡb1」と「RⅡb3」に分けられている。前者は扇谷上杉朝興の時代で、永正十八年（一五一八）から天文六年（一五三七）のうちの後半に、後者は扇谷上杉朝定⁹⁹の時代で、天文六年から河越夜戦があった天文十五年（一五四六）の間のものと比定されている。難波田城が扇谷上杉氏と深い関係にあることが、遺物のうえでも判明したことになる。瀬戸美濃製品は、古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯第4段階まで各段階にわたっており、常滑製品も6型式から11型式まで出土している。ここから、内堀の遺物の年代観は十五世紀後半から十六世紀末までで、特に十六世紀後半に主体があるとされる。

このほかにも人骨や宋銭、板石塔婆、石臼なども出土しており、十四世紀の遺物も確認されているようだが、特に注目されるのは、板碑の多さである。現地に現存する板碑も多いが、「本城」・内堀の発掘でも多く出土し、元応三年（一三二一）から天文年間（一五三二～五五）までのものが確認されている¹⁰⁰。

以上のことから、難波田城は基本的には十五世紀後半から十六世紀末まで幅広い年代観を持つ城と評価されており、現在判明している城の歴史にも合致する内容となっている。特に十五世紀後半の遺物も大量に出土していることから、難波田城が築城された時期はこの頃と推測することができるのではないだろうか。また、大窯第4段階や志戸呂製品が出土していることから、天正十八年の小田原合戦以後の使用も考えられる状況となっている。

これらの成果を踏まえて、次章にて二点の文献史料の検討を行いたい。

2. 文献史料から見た難波田城

（1）史料の紹介と検討

本章で検討する難波田城関係の文献史料は、次の2点である。

【史料1】¹⁰¹

（前略）

一、武蔵国岩付之城近所飯田橋ニ而鍵合ニ、高麗備後与申仁足輕を討取候儀ニ、

今備後を前ニ被有之候、麻倉与名乗候者討取候事、

一、武蔵国岩付小室^(伊奈町カ)与申所ニ而一戦、源七与申者ニ少シからかひ高名之時喧花、黄門様源七ニ御尋何茂槌ニ存候事、

一、武蔵国松山近所陣取候時、岩付より夜懸之夜一戦、当所ニ而勝負無其隠高名也、爰元ニ而源七并年寄候者ハ何茂存候事、

(中略)

一、景虎乱入候所、武州河越籠城之時、高麗郡江手人数を以相働、為討候智略高名之事、

一、河越籠城之時、岩付領ニ而相働人数多打、自身太刀打手柄之事、

一、河越籠城之時、高坂^(東松山市)ニ而相働、自身太刀打人数多討申候手柄之事、

一、高山之城^(群馬県)ニ籠り候時、景虎人数斗ニ而働候時、各申合、我等父子高名故、百余討取追崩シ高名之事、

一、狩野之助討死候得共、高名殿父子無相違退候、其隠無之候、関東高山落候時、走廻り候儀各存罷有候事、

一、武蔵国難波田之城江相働、河越之者共何も走廻り候、大窪屋敷ニ而当地ニ^(ママ)有之参候鯨井与申者其外、我等鑑下ニ而三人討申候、此内負於当地ニ^(ママ)赤垣助左衛門与申候者ニ我等を鑑付候、其時之覚無隠候事、

一、上州沼田之城取出、窪田之城責候時、敵之持将父子兩人共ニ討取、其時三ヶ処手負、当地ニ而藤田大学頭ニ御預置、看病被申候ハ何も存候覚事、

一、伊豆国笠原、甲州江心替之時、我等父子高名討取候事、

一、小田原江景虎乱入時、武州河越より道を留メ置候処、路地江馳出我等を初、生捕討取、乍去此者手柄ニ茂不存候事、

(後略)

十二月三日

正花黒印

【史料2】²⁹⁾

於去五日難波田往返之敵一人、討捕之、感悦候、弥可走廻者也、仍如件、

六月朔日

^(北条)
氏政判

鈴木助三郎トノ

【史料1】は、北条氏の重臣で、伊豆下田城主でもあった清水康英の次男・太郎左衛門(政勝とされる)が、晩年(江戸初期)に書き記した戦功の覚書である。太郎左衛門は兄の新七郎が永禄十二年に死去すると家督を継承し、北条

氏滅亡後は結城秀康に仕え、晩年には正花と名乗り、元和二年（一六一六）に越前にて死去している。子孫は上野国高崎へ移ったようである。正花が晩年に作成した覚書であるため、記載されている出来事は必ずしも年代順ではなく、信憑性の有無も問題となるが、その内容は当時の実際の状況と合致する部分が多く、かつ後述するように【史料2】との関係からも、史料として使用して問題ないものと判断する。【史料2】は、北条氏政の感状写である。宛所の鈴木助三郎がどのような人物であるかは残念ながら不明である。写しではあるが、形式的には問題なく、こちらも史料として使用して差し支えないと判断する。注目すべきは、両史料に「難波田城」「難波田」が登場することである。まずは、それぞれの解釈をしてみたい。

【史料1】の下線部には、清水太郎左衛門が河越城衆たちとともに難波田城を攻撃していること、その際、「大窪屋敷」という場所で鯨井という人物その他3人を鎧にて討ち取ったこと、逆に赤垣助左衛門という武士に鎧で攻撃されたことが記されている。赤垣氏は不明だが、鯨井氏は鯨井という地名が現在も川越市に残っており、そこを名字の地とする武士だと考えられる。いずれにせよ、ここから北条氏の敵方の城として難波田城が存在していたことが判明する⁸⁹。

一方、【史料2】からは、鈴木助三郎が、「難波田」において「往返」していた敵1人を討ち取り、それを北条氏政が賞していることがわかる。「難波田」が北条方であったとも解釈できそうだが、敵が「難波田」とどこかの間を「往返」していると考えるのが自然だろう。よって、やはり「難波田」は敵方であったと考えるのが妥当と判断する⁹⁰。そして、【史料1】で敵方の城として難波田城が見えることや現存する城跡の存在から考えて、この「難波田」も敵方の城としての難波田城のことを指しているものと思われるのである。

以上のことから、文献史料から難波田城の存在を確認できた。そして、【史料1】と【史料2】ともに難波田城を北条氏の敵方の城としており、内容が合致しているため、江戸初期に作成された覚書である【史料1】の信憑性もより高まったといえよう。そこで、次に問題となるのは、この両史料の年代である。両史料とも年未詳であるため、可能な限りの年代比定を行う必要がある。それにより、難波田城がどのような城だったのかも解明できる。

年代を考えるうえで重要なポイントとなるのは、両史料ともに難波田城を北

条氏の敵方の城としていることである。特に【史料1】によれば北条氏の重要拠点である河越城にいる軍勢が難波田城を攻撃しているので、河越城や難波田城周辺が戦乱状況下にあった時期のものと考えることが許されよう。

次に、【史料1】に河越城に籠城している軍勢が河越近辺で活躍している様子が記されていることも注目される。これらは、「景虎乱入候所、武州河越籠城之時」とあるように、永禄三年（一五六〇）から四年（一五六一）にかけて行われた上杉謙信（当時は長尾景虎。以下、上杉謙信で統一する）の関東越山によって北条軍が河越城に籠城中の出来事であることがわかるため、年代が極めて限定される。【史料1】にみられる難波田城攻撃も、河越城衆が活躍していることから同時期のことと考えることができる。

さらに、【史料2】では北条氏政が登場しているが、氏政が氏康から家督を継承したのは永禄二年十二月で、独自の活動を始めるのは永禄四年からである。河越近辺の合戦に伴う感状を出している時期も、永禄四年から七年頃に限定される。謙信が永禄四年六月に上野から越後へ戻ると、それと前後して北条氏は反撃を開始し、七月から九月の間に上杉方太田資正によって落とされた松山城を攻撃しつつ上野にまで攻め入っている。翌永禄六年（一五六三）二月四日に松山城は開城して北条氏の城となり、永禄七年（一五六四）七月には太田資正の居城・岩付城も北条氏によって落城したため、以後河越近辺での戦争は小田原合戦時までみられなくなる。

よって、両史料は、永禄四年から七年の間に限定されることになるが、なかでも河越籠城衆が河越近辺で活躍している永禄四年の可能性が極めて高いといえよう。そこで、永禄三年・四年の河越城近辺の様子をさらに詳しくみてみたい⁶⁹。

（2）永禄四年前後の河越地域をめぐる情勢

永禄三年九月月上旬、上杉謙信が三国峠を越えて上野国に入ると、同月下旬に北条氏康は河越城へ、翌月には松山城へ移り、武田信玄と連携して上杉軍を迎え撃とうとしていた。しかし、岩付城の太田資正や忍城の成田長泰、勝沼城の三田綱秀など武蔵国内の主だった領主が相次いで上杉方となったため、氏康は上杉軍が南下してくると小田原城へ退却し、十二月から河越城では籠城戦が開始されることになった。同年十二月二日に、北条氏康・氏政が連署で池田安芸

守に対し、河越籠城によって借錢・借米徳政や、本意のうで忍・岩付領内で望みの地を与えることを約束している⁹⁹。翌年二月下旬、謙信は上野厩橋城から武蔵松山城へ移り、三月下旬には小田原城を包囲した。しかし、わずか十日ほどで包囲網を解き、四月下旬には鎌倉の鶴岡八幡宮で関東管領就任を報告し、上野厩橋城に戻って六月下旬には越後へ帰国している。

この間、河越城には、武蔵小机城主・北条氏堯や同盟者である駿河の今川氏真からの援軍などが籠城していた。同年壬三月二十七日には、今川氏から派遣されていた畑彦十郎が、正月に松山筋で戦功を挙げ、当時河越城の守将であった北条氏堯から判物を得て、それをもとに四月八日に氏政から感状が出されている¹⁰⁰。同様に派遣された小倉内蔵助も、河越城近辺の川窪口や平方口、高麗郡における合戦での活躍を、今川氏真から四月二十五日に賞されている¹⁰¹。四月晦日には、河越衆筆頭で河越城代であった大道寺周勝が、清田内蔵助（佐）に対して、籠城の戦功により河越宿に関するさまざまな特権を与えている¹⁰²。周勝も河越城に籠城していた可能性がある。河越城の西側至近距離にある的場郷においても敵の伏兵との合戦があり、七月二十五日付けで石川十郎左衛門尉と清田内蔵佐（助）が北条氏政から感状を得ている¹⁰³。

それでは、当時、河越周辺を攻撃していた上杉軍の主力は誰の軍勢だったのだろうか。同年五月二十二日、太田資正は家臣の比企左馬助に「河越之庄之内小室矢沢百姓分」を前々のごとく与えており¹⁰⁴、七月二十七日には同じく家臣の道祖土図書助が男衾郡赤浜にて松山城主・上田安獨齋の軍勢と戦って活躍している¹⁰⁵。また、【史料1】からは、河越籠城衆が岩付領へたびたび侵攻していること、逆に岩付領から攻撃を受けることもあった様子がうかがわれる。よって、河越近辺における一連の合戦の相手は、基本的には岩付城の太田資正軍だったことがわかる。

さらに情勢を追ってみよう。永禄四年九月、北条氏は青梅・秩父方面へも攻め入っており、勝沼の三田氏を滅亡させ、秩父の日尾城や天神山城を手中にしている。そのことを報じた九月十一日北条氏政書状写によれば、氏政自身は松山城に近い比企郡高坂に在陣しており、江戸城を守備する太田康資に河越城に移るよう要請している¹⁰⁶。十月下旬には比企郡飯田で合戦があり¹⁰⁷、十一月二十七日には松山城の救援にやってきた上杉軍を児玉郡生山で迎え撃ち、勝利を収めている¹⁰⁸。このほか、【史料1】に書かれている河越籠城中に行われた数々

の合戦も、おそらく永禄四年に起きたものがほとんどだと思われる。よって、永禄四年には、河越城を中心とした一定範囲内の各地で北条軍と上杉軍（岩付太田軍）との合戦が頻発していたことがわかる。

翌永禄五年からは、北条氏が本格的に反撃を開始している。同年前半は河越近辺での合戦を確認できないが、同年十月頃から北条氏は武田氏とともに松山城包囲を開始している。同年十月十六日には入間台において合戦があり、清田内蔵助が敵一人を討ち取っているが⁹⁸、松山城攻めに連動して行われた合戦の一つだろう。この入間台の場所は不明だが、河越近辺の可能性が高い。そして、翌永禄六年二月四日に松山城は落城する。その後、河越近辺での合戦は確認されず、永禄七年七月には岩付城も落城し、河越近辺の軍事的緊張状況は完全に解消されることになった。

以上の情勢を踏まえるならば、永禄五年から七年の可能性も否定できないが、【史料1・2】ともに永禄四年の可能性が最も高いといえるだろう。ここから、難波田城が敵方、つまりは上杉方の城であり、河越城に籠城する北条軍に対する拠点として上杉方により取り立てられた城と理解することが許されよう。さらにいえば、先に指摘したように河越近辺での合戦の主な相手は太田軍であったことから、難波田城も直接的には岩付太田氏の城だった可能性が高い。

それを裏付けるかのように、『小田原衆所領役帳』によると、「他国衆」として太田資正が河越近所の古尾谷に、息子で後に北条氏家臣となる太田資房（氏資）が難波田近所の大窪郷や福岡に所領を持っているが確認され、難波田周辺地域はもともと岩付太田氏の所領だったことがわかる。さらに、太田資正の妻は難波田善銀の娘とされ、その息子が資房であることから、岩付太田氏と難波田氏が姻戚関係にあったこともわかっている⁹⁹。こうした状況からも、難波田城が岩付太田氏の城として機能していた可能性は極めて高い。そして、難波田城の南側を通る「羽根倉道」を通じて岩付方面と「往返」していたのではないだろうか。

いずれにせよ、従来難波田氏や北条氏家臣・上田氏の城とされてきた難波田城だが、永禄四年の一時期に上杉方の岩付太田氏の城として北条方の河越城と対峙していたと思われることが明らかとなった。そして、遅くとも岩付城が落城した永禄七年七月までには河越城衆を主体とした北条軍によって落城し、岩付太田氏の城としての役目を終えたことになる。

そうなる、次に問題となるのは、現在みられる縄張が一体いつ構築されたものなのかだが、それを今回明らかにした永禄四年段階としてよいのか、それともそれ以前、あるいは以後なのか、本稿においては判断できない。難波田城の発掘調査成果のさらなる整理・検討と新たな発掘調査の実施、さらには縄張論の議論も合わせつつ、本稿で明らかにした事実を踏まえて、慎重に進めるべきであると考ええる。

(3)「大窪屋敷」について

本稿は難波田城について検討したものであるが、実は【史料1】には、難波田城以外に、もう一つの城が登場している。それは「大窪屋敷」なる城である。清水太郎左衛門が難波田城攻めを行った際に、「大窪屋敷」において戦い、鯨井氏を討ち取ったと記されていることから、難波田城内の一曲輪か、近辺に別に存在する出城のような存在の可能性がある。

そこで、同名の城跡が確認されていないかを調べてみると、難波田城の北西1.5kmほどの場所に「東大久保」という地名があり、『埼玉県の中世城館跡』⁹⁸によればそこに「大久保城」なる城があることになっている。現在、城跡には何一つ遺構は残っておらず、正確な所在地も不明のようである。

この典拠となっているものは、やはり『新編武蔵風土記稿』である。それによると、昔は「大窪村」と書かれ、「古城蹟 村の北河越往還の東側にあり、城蹟とのみ伝えり、何人の居城なりしや」とある。難波田城の絵図等を見ても、「大窪屋敷」なる曲輪は見当たらないため、この大久保城の地が「大窪屋敷」である可能性は極めて高い。

大窪村は、先述したように『小田原衆所領役帳』にも登場する。そこには、太田氏資の所領として「五十五貫文 入東大窪郷 大窪丹後、同内匠助、同勘解由」とあることから、北条氏（太田氏資）の家臣として大窪氏が存在し、大窪郷を知行していたことは明らかである。これをもとに、『富士見市史』通史編上⁹⁹では、大久保城はこの大窪氏の館のことを指すのではないかとしている。

「大窪屋敷」についてわかることは以上であるが、「屋敷」という名称から、「城」とは区別される存在であったことがわかる。当時の史料に登場する「屋敷」について検討した松岡進氏は、「屋敷」一般は当然ながら城館そのものではないこと、「屋敷」は「城」や「要害」など通常の城館よりは軍事的な格差

があるが、戦争状況に対応して一定の軍事的機能を果たすこともあったこと、運用上は純然たる軍事施設としての城館との境界は曖昧であったことを明らかにしている⁹⁹⁾。【史料1】はあくまで江戸期の覚書であり、戦国期当時の用法で使用した言葉なのかは不明だが、「難波田城」と「大窪屋敷」と書き分けられていることから、同様に考えてよいのではないだろうか。

そうすると、推定にならざるを得ないが、「大窪屋敷」はあくまで「屋敷」であることを考えると、大窪氏の館のことを指している可能性が高いように思われる。それが、永禄四年の戦乱状況下で「屋敷」としての性格に軍事的性格が付与され、難波田城のいわば出城として岩付太田氏が使用していたのではないだろうか。現時点では、そのように考えておきたい¹⁰⁰⁾。

おわりに

本稿では、従来文献史料には登場しないとされてきた難波田城について、二点の史料を紹介・検討した。その結果、両史料とも永禄四年（一五六一）から七年（一五六四）のものであり、特に永禄四年の可能性が高いこと、難波田城は北条氏の敵である上杉方、特に岩付太田氏の城だった可能性が高いこと、難波田城の出城のようなものとして「大窪屋敷」が存在していたこと、などを明らかにした。

従来、『風土記稿』等により、難波田城は難波田氏の居城で、その後北条氏家臣・上田氏の居城となったと理解されてきた。考古学的には十五世紀から十六世紀末まで使用されていたことが立証されているものの、文献史的には難波田氏の居城、あるいは上田氏の居城であることを示す明確な文献史料は見出せていなかった。その点、本稿で明らかにした永禄四年ころに上杉方（岩付太田方）の城であったという新たな事実、難波田城の性格や縄張り、年代観を考えると今後基本的かつ重要な情報となるだろう。多種多様な遺物が出土している難波田城であるが、難波田氏や北条氏（上田氏）との関係を引き続き探ると同時に、当時上杉方であった岩付太田氏との関係も検討していくことが今後求められよう。

城郭関係の文献史料は、まだまだ埋もれていることが予想される。今後もその発掘・検討を積み重ね、議論の基礎となりうる情報の確定に力を注いでいき

たい。

- (1) 「杉山城問題」については、藤木久志監修・埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』（高志書院、二〇〇五年）、拙稿①「戦国前期東国の戦争と城郭―「杉山城問題」に寄せて―」（『千葉史学』第五一号、二〇〇七年）、齋藤慎一「戦国大名北条家と城館」（同『中世東国の道と城館』東京大学出版会、二〇一〇年、初出二〇〇八年）などを参照。なお、「杉山城問題」とは、従来永禄年間頃の北条氏の城とされてきた埼玉県嵐山町の杉山城が、発掘調査および文献史料の検討から永正・大永年間頃の山内上杉氏関係の城であるとされたことによって起きた、城郭の縄張年代をめぐる論争である。
- (2) 前掲注1 拙稿①、②「境国国衆の居城と大名権力―相模津久井城掟の分析から―」（『千葉史学』第五三号、二〇〇八年）、③「戦国前期東国の城郭に関する一考察―深大寺城を中心に―」（一橋研究編集委員会編『一橋研究』第三四巻第一号、二〇〇九年）、④「戦国後期の南常陸と多気城」（一橋研究編集委員会編『一橋研究』第三四巻第三号、二〇〇九年）。なお、縄張編年の研究史整理をしたものとして、⑤「縄張編年論に関する提言―その研究史整理と課題―」（『城郭史研究』第二九号、二〇一〇年）がある。
- (3) 『日本城郭大系』第六巻埼玉・東京（新人物往来社、一九八〇年）。
- (4) 中田正光『埼玉の古城址』（有峰書店新社、一九八三年）。
- (5) 『富士見市史』資料編二考古（富士見市、一九八六年）。
- (6) 『埼玉の中世城館跡』（埼玉県教育委員会、一九八八年）。
- (7) 『富士見市史』通史編上（富士見市、一九九四年）。
- (8) 『難波田城跡』（富士見市文化財報告第五〇集、一九九九年）。
- (9) 『難波田城のすべて』（富士見市立難波田城資料館、二〇〇四年）。
- (10) 以上の点は、前掲注8の四～一一頁を参照。
- (11) 難波田氏に関する研究としては、大図口承「国人難波田氏（上）―その存在形態を中心に―」（『埼玉史談』第三八巻第一号、一九九一年）、同「国人難波田氏（中）―その存在形態を中心に―」（『埼玉史談』第三八巻第二号、一九九一年）、同「国人難波田氏（上）―その存在形態を中心に―」（『埼玉史談』第三八巻第四号、一九九二年）がある。
- (12) 高麗経澄軍忠状（『新編埼玉県史』資料編五中世一、三八〇号、町田文書）。
- (13) 足利満兼寄進状（『新編埼玉県史』資料編五中世一、六三六号、鶴岡八幡宮文書）。
- (14) 深大寺城については、前掲注2 拙稿③を参照。
- (15) 『新編埼玉県史』資料編八中世四付録『小田原衆所領役帳』八四頁。
- (16) 前掲注5、前掲注8など。
- (17) 浅野晴樹「戦国期城館の年代観」（前掲注1『戦国の城』所収、二〇〇五年）。特に五二・五三頁を参照。
- (18) この点については、前掲注8の八四頁を参照。
- (19) 田中信「葛西城と扇谷上杉氏のかわらけ」（葛飾区郷土と天文の博物館編『葛西城と古河公方足利義氏』雄山閣、二〇一〇年）、特に第四図を参照。
- (20) この点については、前掲注8の八四・八六頁を参照。
- (21) 清水正花武功覚書（『群馬県史』資料編七中世三、三六九四号、清水文書）。なお、『大井町史』資料編1 原始古代中世六四三、六四四頁にも一部収録されている。
- (22) 北条氏政感状写（『戦国遺文』後北条氏編<以下、『戦北』とする>三八五七号、古今感状集）。なお、『小田原市史』史料編中世Ⅲ小田原北条2にも収録されている（同二二〇七号）。

- ㉓ なお、【史料1】については、すでに石塚宏明氏によって難波田城関係史料として検討されていることを知った（石塚宏明「戦国期関東における小規模城館について」目白大学大学院修士論文、二〇〇四年）。その内容は一般に公開されていないため、早期の活字化を望みたい。
- ㉔ 前掲注22『小田原市史』では、「往返」の意味を「出没すること」としているが、基本的な意味としては当時の史料上でも「行き来する、往復する」であるので、難波田とどこかの間を行き来している、と解釈するのが妥当だろう。
- ㉕ 以下、次節での基本的な政治情勢の推移は、特に断わりがない限り、市村高男『東国の戦国合戦』（吉川弘文館、二〇〇九年。特に一五〇頁～一七二頁）に拠っている。
- ㉖ 北条氏康・氏政連署判物写（『戦北』六五六号、相州文書所収大住郡武兵衛所蔵文書）。
- ㉗ 北条氏堯判物（『戦北』六九三号、福田文書）、北条氏政判物（『戦北』六九六号、福田文書）。
- ㉘ 今川氏真判物写（『新編埼玉県史』資料編六中世二、三〇七号、古今消息集二）。
- ㉙ 大道寺周勝判物（『戦北』六九九号、浄光寺文書）。
- ㉚ 北条氏政感状（『戦北』七一〇号、諸州古文書甲州四下）、北条氏政カ感状写（『戦北』七一一号、古文書十）。
- ㉛ 太田資正判物写（『新編埼玉県史』資料編六中世二、三〇九号、武州文書十四比企郡）。
- ㉜ 太田資正感状（『新編埼玉県史』資料編六中世二、三一六号、道祖土文書）。
- ㉝ 北条氏政書状写（『戦北』七一一号、士林證文二）。
- ㉞ 北条氏政感状写（『戦北』七二〇号、岡谷家譜）。
- ㉟ 北条氏政感状（『戦北』七二五号、桜井文書など）。
- ㊱ 北条氏政カ感状写（『戦北』七九三号、古文書十）。
- ㊲ 黒田基樹「岩付太田氏の動向」（同『扇谷上杉氏と太田道灌』岩田書院、二〇〇四年。特に一九一頁）、新井浩文「太田氏資」（『戦国人名事典』吉川弘文館、二〇〇六年）。なお、黒田論文によると、太田資正は難波田善銀の嫡養子として迎えられたとの説があるという。このほか、『戦国の集落と領主』（富士見市立難波田城資料館、二〇〇九年）にも、難波田と岩付太田氏との関係が詳しく紹介されている。
- ㊳ 前掲注6の一八頁を参照。
- ㊴ 前掲注7を参照。
- ㊵ 松岡進「氏康期の北条領国における城館と戦争」（藤木久志・黒田基樹編『定本北条氏康』高志書院、二〇〇五年）。特に二四五頁～二五〇頁を参照。
- ㊶ なお、この「大窪屋敷」についても、前掲注23石塚論文で若干検討されている。

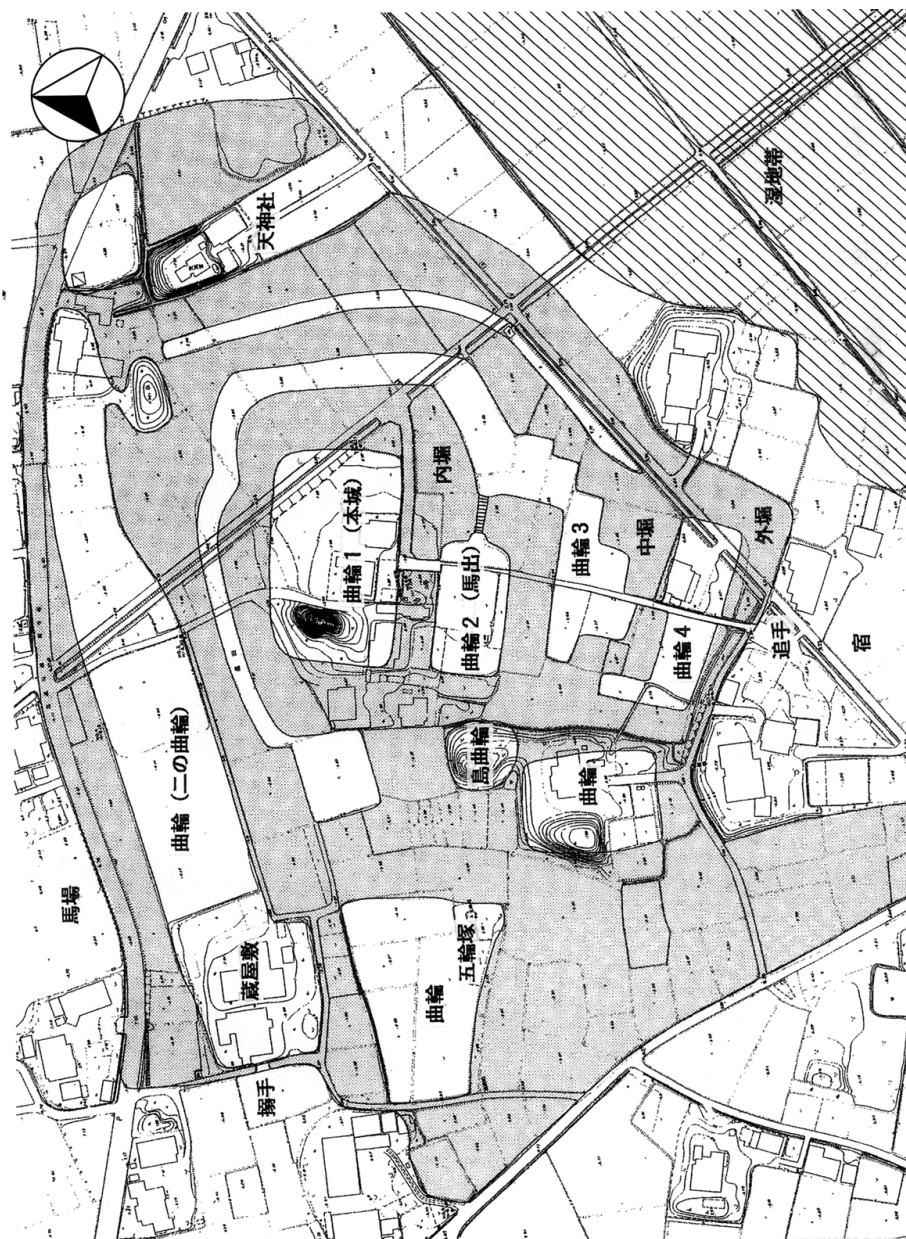


図1 難波田城推定縄張り図(注9より引用)

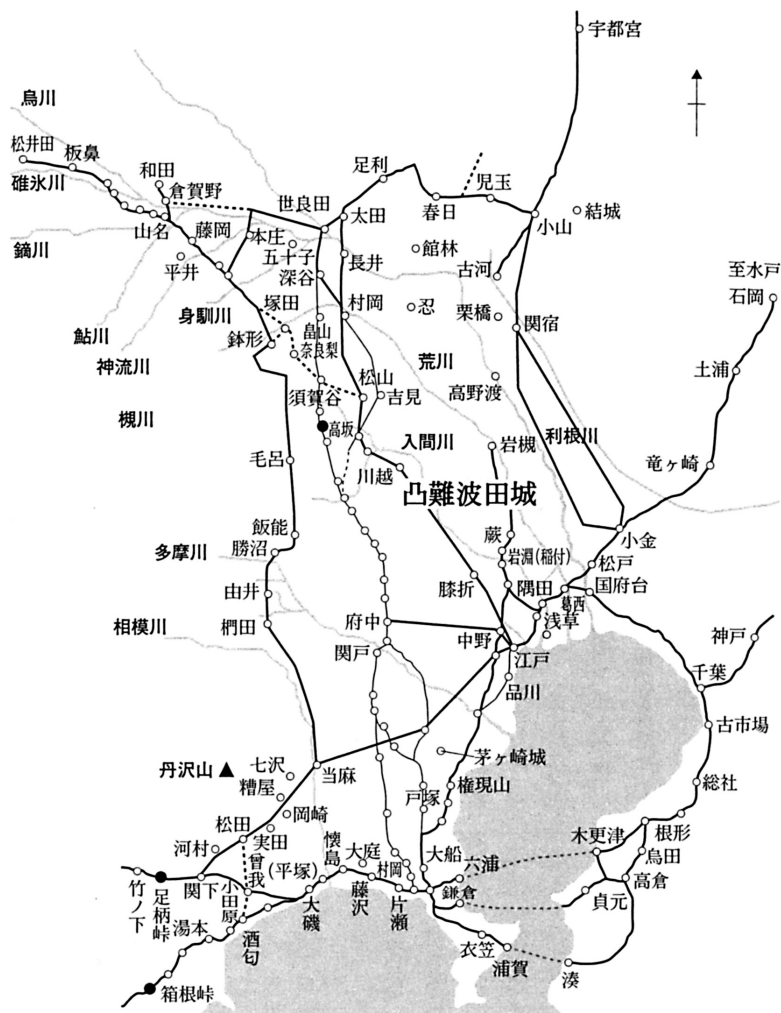


図2 難波田城周辺図(齋藤慎一『中世東国の道と城館』〈東京大学出版会、二〇一〇年〉所収「戦国期街道要図」に加筆)